

国立がん研が初推計 全国8万7000人

日本では、晩婚化に伴い出産年齢が上昇したため、子供が成人する前に、がんを発症する患者さんが増えています。

がん対策基本法やがん対策推進基本計画には、がん患者の家族に対する相談支援が重要だと書かれています。その対象は主に配偶者ら成人であって、子供についてはほとんど注目されていませんでした。

しかし、患者さんにとって、成人前の子供は一番の心配のタネで



がんの親を持つ子供の支援策を話し合う金沢医科大学病院関係者＝同病院

れています。その中に、子供自身が情緒や行動に問題があると認識する一方で、親はほとんど気づいていないという報告があります。子育て中の患者は闘病中もよい親であり続けたいと思っています。子供には余計な心配をかけたくないから、がんとは伝えていないという方も少なくありません。でも、それは大人が困らない方法を選択しているのかもしれない。子供は、一番大切な親に変化が

子供にどう伝えますか？

がんの親を持つ12歳以下 石川で年間400人

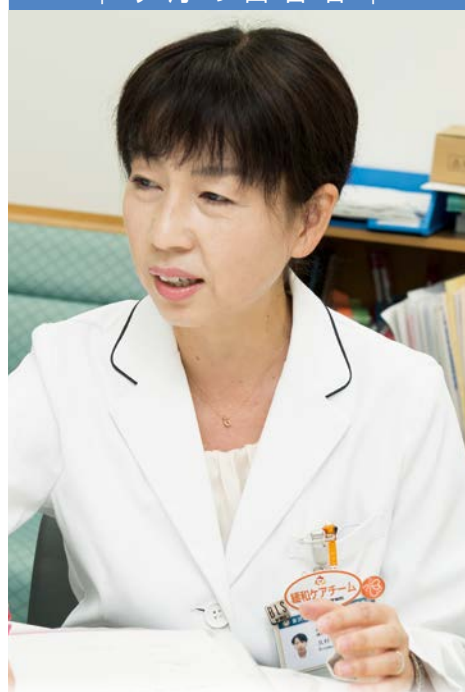
もし、あなたががんを患った時、家族にどのように伝えますか。

まして、家族にまだ幼い子供がいた場合はどうしますか。

「子供に伝えるべきか、伝えるとしたら、どのように伝えるか」。迷うところではないでしょうか。

金沢医科大学腫瘍内科学講師の久村和穂先生に聞きました。

今月の回答者



ひさむらかずほ
久村 和穂

金沢医科大学
腫瘍内科学講師
同大学病院緩和ケア委員会委員
社会福祉士

あり、子供自身も親の病気に最も影響を受ける年代だといえます。

昨年11月、国立がん研究センターが18歳未満の子供を持つがん患者とその子供について、年間に新たに発生する人数や平均年齢を発表しました。こうした調査結果が公表されるのは初めてです。

調査結果によりますと、18歳未満の子供を持つがん患者は全国で年間、5万6143人います。子供の数は8万7017人です。患者の平均年齢は男性が46・6歳、女性が43・7歳。子供の平均年齢は11・2歳でした。子供の63%が小学生以下でした。

この調査結果を基に、石川県内のがん患者の子供の数を推計すると、1年間にがんの親を持つ子供が約640人発生し、そのうち約400人が小学生以下となります。毎年、これだけの数の子供が増えているわけです。

察知し一人で悩む子供 親はほとんど気づかず

こうした未成年が抱える問題についての研究は、海外では結構進んでおり、内向性が強まったり、男の子は孤立化しやすいなどの調査結果が発表されています。国内でも少しずつですが、研究が行わ

られ、「魔術的思考」と呼ばれています。

子供は自分を中心に、主観的に考える傾向が強いので、全く因果関係がないのに、自分が念じると実際に物事が起きたり、何か起きたら、それは自分のせいだと思い込んでしまうのです。

低学年に限らず、中高校生でも、「親に苦労やストレスをかけたから、がんになった」と心の中で自分を責め、悩んでいる子供がいます。

こうした子供たちは、家庭でも学校でも、誰にも相談できず、孤立してしまします。必要以上に不安や罪悪感を抱きながらも、それを周りの大人に気づかれないようにしていることがあります。自分がいろいろと質問をして親を困らせたりしないよう、親を気遣う子供もいます。

子供に病気についてきちんと説明しないしていると、人格形成の重要な時期に、周囲の人と信頼関係を築けないまま大人になってしまうという大きな代償を払うことになりかねません。

子供にがんであることを伝える時、3つの要点があるといわれます。

① ②「がん」という言葉を使う③ この病気は移らないーと伝えることが大事です。

**がんという言葉を使う
誠実に向き合い安心感**

「がん」ではなく「病気」という言葉を使うと、風邪のように移るものと考えてしまい、自分も重い病気にかかるのではないかと心配する子供もいます。

親の病気はがんであり、移る病気ではないから、今まで通り、抱きついて大丈夫だよ、と説明することが大切です。

病気を含めて、親と子供のコミュニケーションが十分に行われている家庭では、子供はどんな状況でも親が誠実に向き合ってくれるという安心感を持ちます。そこから、親子間の信頼関係がより深くなっていくのです。

多くの研究者は、そうした親子関係の基盤を持つ子供は「親ががんになった。死ぬかもしれない」という難局に直面しても、家族や周囲の人に支えられながら、何とか自分なりの対処方法を見つけ、成長を遂げると報告しています。

「神様が怒ってがんに」 低学年に多い特有思考

一方の子供はテレビやネットの情報から、想像を膨らませていきます。実際は早期発見のがんで完治の見込みが高いのに、親ががんになったことだけで、「お父さんはがんでも、もうすぐ死んでしまう」と、がんイコール死に結びつけてしまうケースがあります。

また、「自分が悪い子だったから、神様が怒って、お父さん、お母さんをがんにした」とか、「親の言いつけを守らなかったから、親を重い病気にしてしまった」と思い込む傾向があります。小学校低学年に多く見

支援策を立ち上げ 来年度目指し準備

金沢医科大学病院では、院内の緩和ケア委員会に「子育て中のがん患

表 クライムプログラムの内容（子供グループ）

回	テーマ	感情	活動内容
1	がんにつわる話を共有し、孤立感を軽減する	幸せ・楽しい	自己紹介カード作り
2	がんや治療に関する知識を増やす	混乱	人形作りとがん教育
3	悲しみの感情を表現して緩和し、対処法を学ぶ	悲しみ	「気持ち」の面作り
4	自分が持つ強さを認識し、不安を緩和	怖い・不安	「強さ」の箱作り
5	怒りの感情に適切に対処できるよう支援	怒り	怒りバイバイさいころ作り
6	親とのコミュニケーションを手助け	気持ちを伝える	お見舞いカード作り さよならパーティー

者とその子供の支援プロジェクト」を立ち上げました。米国で開発されたCLIMB（クライム）というプログラムを導入して、子供たちの苦痛、悩みを軽減しようという試みです。

看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカーなどの多様な職種で構成されたメンバーで取り組んでいます。

このプログラムは2010（平成22）年に日本版が完成し、関東地区のがんの拠点病院などで導入されていますが、北陸など日本海側ではまだ実施しているところはありません。

クライムは親の病気に関連するストレスへの対処能力を高めるのが目的です。精神疾患や心身症を治すための心理セラピーではありません。精神面の健康の増進が目的で、困難な状況をどうやって乗り越えるかを学ぶことが狙いです。

支援の対象は親ががんであることを知らされている小学生と親です。参加する子供は週1回、2時間のプログラムを6週連続で受講します。メンバーは固定で、回を

選んでの受講はできません。

各回のテーマや活動内容は上の表のとおりです。クライムが大切に行っているのは、参加した子供たちがそれぞれ共通点を見つけ、孤立感を軽減し、仲間を作ったり、自分の気持ちを自由に表現することです。

今夏に「探検隊」開催 「治療に頑張れそう」

クライムは2017年度スタートを目指しており、その準備段階として、昨年8月に北國がん基金の助成で「夏休みキッズ探検隊」を実施し、今年も7月30日に開催します。

探検隊には、クライムプログラムに組み込まれたがん教育と心理教育を凝縮しています。昨年は手術室の見学や化学療法に使う点滴の実習も行い、看護師が1対1で付き添い、子供が恐怖心を抱かないよう留意しながら進めました。

中でも、手術室は怖がるかなと心配しましたが、「手術台に上がりたい」という要望や質問が相次ぎ、心配は杞憂に終わりました。終わった後のアンケートも「親

と」病気のことを話しやすくなりました」との感想や、保護者から「子供ががんのことを聞いてくるようになってきました。私も治療に頑張っているけそうです」と前向きな言葉が返ってきました。

探検隊の実施を通して、私たちが学んだのは「患者さんの支援なしには、子供の支援にたどりつけない」ということと、「子供さんの成長は患者さんを支える大きな力になる」ということです。ぜひ、一人で悩まず、この夏の探検隊に参加していただければと思っています。

夏休みキッズ探検隊 2016

7/9（土）
メ切

日時 7月30日（土）10時～15時
場所 金沢医科大学病院
対象 小学1～6年生（定員10人）
内容 ①がんについて学ぼう！
②病院内を探検しよう！など
参加費 無料（昼食・おやつ付き）
申し込み 金沢医科大学病院がん診療連携拠点病院
問い合わせ 担当事務局「夏休みキッズ探検隊」係
☎ 076 (286) 3511 内線 8514